■研究発表論文

近世の絵画にみる筑波山の特徴

The Characteristics of Mt. Tsukuba Based on an Analysis of Drawings in the Early Modern Period

西邑　雅未*　　黒田　乃生**

Masami NISHIMURA　Nobu KURODA

Abstract: The purpose of this research is to analyze drawings that illustrated Mt. Tsukuba in the early modern period, and to understand how people of that time regarded the mountain. The appearance of Mt. Tsukuba is characterized by two peaks. Since the Nara period, the mountain has inspired Japanese *waka*. It was also known as a sacred mountain. The drawings did not express the mountain's characteristics in detail. In Edo period, detailed picture maps were created as guides for pilgrimage climbs. In addition, this mountain was often drawn as a part of the Edo landscape. The types of drawings included guides, records, hanging scroll, and those used for faith. Their compositions were diverse, with the mountain featured either prominently or in the background. Most of the illustrations were drawn from east of Edo. Since Mt. Tsukuba was included in works by celebrated painters and in mass-produced *hanga*, the mountain became well recognized. These were beautiful landscape drawing that included lakes or rivers; people's daily lives were not portrayed. It can be inferred that people's faith in Mt. Tsukuba has continued from the ancient past.

Keywords: *Mt. Tsukuba, drawing, the early modern period*
キーワード：筑波山，絵画，近世

１．はじめに

（１）研究の背景と目的

茨城県つくば市にある筑波山は，西峰に男体山（標高871m），東峰に女体山（標高877m）があり，それぞれ伊弉諾尊，伊弉冊尊が祀られている。信仰の山として古くから登拝対象でありながらも，歌垣や国見の場として親しまれ，万葉集や古今和歌集に登場してきた。しかしこれらの歌では筑波山の特徴的な山容を示しておらず，筑波山の最古の記述とされる713（和銅6）年の「常陸国風土記」における「富士山と筑波山」の神話[1]でも，山容の表現はない。絵画で最も古いのは1295（永仁3）年の「善信聖人親鸞伝絵，巻四第二段」で，ここで二峰の特徴が描かれている[2]。「西の富士，東の筑波」と言われてきたように，両者共に江戸時代にその姿は頻繁に描く対象となってきた。現在筑波山はジオパークを目指す動きがあり，自然だけでなく信仰，風土，民俗など文化的な面も評価しながら活動している[3]。筑波山の絵に焦点を当てることは，新たな文化的価値を見出すことに繋がり，今求められていると言える。さらに，近世中期以降は民衆の社寺参詣が高揚し，純粋な信仰心で筑波山に参拝するだけでなく遊山講的な側面が多かった[4]時期でもあったという。これは後に観光へと展開していくため，近世はその過渡期であったと言える。本研究は，近世における筑波山の絵を整理し，その描写を把握することで，当時の人々が筑波山をどう認識していたかを明らかにすることを目的とする。

（２）先行研究

筑波山の絵画の研究は，富士と筑波が対に扱われ，同じ画面で描かれるようになった経緯を詩歌と絵画の両面から追ったものがある[5]。また，柴田是真が下絵を描いた手拭と着物帯の富士と筑波の意匠の成立背景を論じたものがある[6]。どちらも隅田川から望む富士と筑波の情景が江戸名所であったことを明らかにしている。山の景観の研究は，ソウルの「漢陽真景」の描画地点を明らかにしたもの[7]，谷文晁の日本名山図会の分析[8]がある。また，歴代の富士図を用いて日本の風景表現の歴史を解説したものがある[9]。これらの研究をふまえて筑波山の描写の展開を明らかにする。

（３）研究方法

本研究は資料調査である。近世の資料を収集するため，先行研究や筑波山に関する展示[10]で扱われた絵，国立情報学研究所CiNii で「筑波」を検索抽出したものの中から挿絵のあるもの，また，国立国会図書館「錦絵で楽しむ江戸の名所」サイト，江戸名所や街道関連の文献から筑波山が描き込まれたものを用いた。なお，解説書にて筑波山であると特定されているものを扱うこととした[11]。以上の方法で収集した絵73件[12]を，その種類によって4 つに分類した。①山へ参拝する際に用いるガイドブックや，各地域の名所を集約した，案内書として使われていた絵，②街道を管理するために作成された絵図や巡見した際のスケッチといった記録絵，③屏風や掛軸など鑑賞用に描かれた絵，そして①～③に当てはまらなかった，冊子の挿絵や布教に利用されたと思われる絵を④その他（挿絵，宗教）とした。構図については3 つに分類した（表 - 1）。A は，筑波山のみ，もしくは筑波山と山麓の景色を合わせた筑波山を主題とする絵である。B は，画面に大きく風景が描かれ，その背景に筑波山やその他の山が配置される絵である。なお，B には「筑波」を題名に入れる B1 と，入れない B2 がある。構図は同じでも，B1 は題名に山名があることから，絵の主題が筑波山であると認識でき，B2 と区別できる。C には，A と B にあてはまらない絵を分類した。以上の内容を表 - 2[13]にまとめた。

２．筑波山の描写

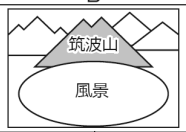
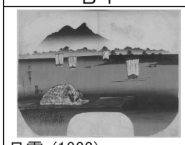
（１）絵の種類

①案内書

案内書は50件あった。筑波山は山岳信仰の対象となっており，特に江戸時代は幕府の庇護下に入り参拝者が増大した[14]という。そうした参拝者に向けたガイドブックの役割を果たしたと思われるものは50件中8件（No.3, 4, 6, 8, 10, 13, 23, 30）あった。こ

*筑波大学大学院人間総合科学研究科　　**筑波大学芸術系

表 - 1　構図の類型と代表例

	A	B		C
構図				A～B以外
例		B 1 	B 2	
	谷文晁（1812）：「日本名山図会」のうち「筑波山」	旦霞（1833）：「富士筑波隅田川の圖」のうち「筑波山遠望」	小松原翠渓（1828）：「鞠塢編 墨水遊覧誌」の一部	

れらの構図は，筑波山の北に位置する推尾山（図 - 3）の神社境内を描いた「推尾山風景絵図」（No.3）が C であり，それ以外の 7 件は A の構図をとる。特徴として，筑波山神社（当時は中禅寺）を俯瞰し，山中の道や祠などが描かれている（図 - 1）。これら参拝ガイドブック以外では，「日本名山図会」（No.24），「総州真景図藁」（No.25, 26）など，全国もしくは常総地域の名所の一つとして筑波山の絵が掲載されている。筑波山が単独で選ばれている No.1, 5, 18, 20, 24, 25, 26, 34, 68, 70 では，No.26 の「利根川と筑波山」以外すべて A の構図をとる。特にこの案内書の中で特徴的なのは，江戸の名所として No.1, 5, 19, 35, 36, 38, 39, 44, 47-60, 66, 67 の 24 件の絵で登場していることである。No.48-60 の「名所江戸百景」は，119 枚のうち筑波山が載る絵は 13 枚[15]に及び，筑波山が江戸からの眺めの重要な要素だった[16]ことが理解できる。このように江戸から筑波を見た場合，隅田川，日暮里，両国橋，飛鳥山（図 - 2）など，江戸の東側を視点場として B2 の構図をとっている。

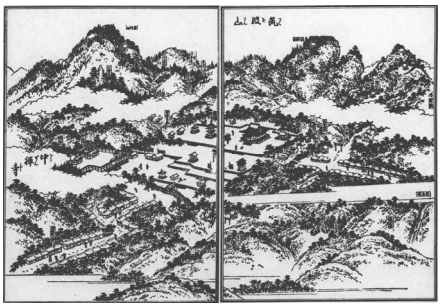
案内書に分類できる絵は「名所江戸百景」に代表されるように，錦絵の多さが目立つ。1765（明和 2）年に鈴木晴信が完成したこの多色刷り版画は，江戸後期において盛んになり，歌川広重の風景版画は人気を博した[17]。この手法は量産が可能で，「江戸庶民の重要なメディアとして，時事を報道する役目を担っていた」[18]ので，人々の目に触れる機会も多かったと思われる。またこの江戸後期という時代は，明清画の様式に倣った文人画が流行した時代でもある。No.9 の池大雅は京都で文人画家として大成し，No.24 の谷文晁は江戸に文人画を広めたことでも有名である[19]。さらに No.25，26 の亜欧堂田善は，初めて日本で銅版画を用いた司馬江漢（No.15「三囲景図」）にも師事したことのある人物である。そのため「利根川と筑波山」（No.26）は透視図法を用いる西洋風絵画に仕上がっている。しかし亜欧堂は元々谷文晁の弟子だったため，谷の No.24（表 - 1 の A）と亜欧堂の No.25 の「筑波山」は構図，山容が類似している。筑波山という題材は，画家の師弟関係によって受け継がれたり，江戸東側，特に飛鳥山，日暮里，隅田川から東方を描くという当時の流行に乗ることで，近世末期まで継承されてきたと言える。

②記録

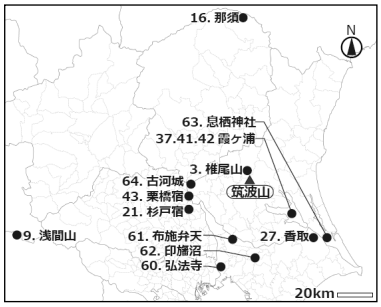
記録絵は 5 件である。山麓の町の水争いの裁判結果を示した「筑波町沼田村と臼井村神郡村水論裁許絵図」（No.2）や，江戸幕府が街道の情報を収集するために作られた[20]「五海道其外延絵図」（No.21），徳川家慶 12 代将軍就任に伴って行われた幕府領の巡見の記録[21]をした「天保巡見日記」（No.40），参詣各所で風景を素描した「総常日記」（No.27）などである。これらに共通するのは，宗教的な意味や名所紹介の要素は薄く，客観性をもって描かれており，当時のその地域の様子を今に伝える史料となっている。描く場所によって筑波山の大きさは異なり，構図は A~B にわたっている。

③鑑賞

鑑賞絵画は 14 件あった。そのうち「絵手鏡」（No.29），「和亭集．中」（No.72），「雅邦遺墨集」（No.73）は画集の類，そして旦霞の「富士筑波隅田川の図」（No.37）は団扇絵で，それ以外は単体の絵画である。カラーで描かれた「筑波茂陰図」（No.1），「筑波茂陰」（No.5）は，題名の通りどちらも山頂が緑や青で彩られている。これは新古今和歌集の「筑波山端山繁山しげけれど思ひ入るにはさはらざりけり」[22]（源重之）という和歌にちなんだもので，筑波山を描写する上で影響を与えている[23]。特に青や緑の筑波山と白の富士山が対になることが多く， No.16, 17, 31, 32, 37（表 - 1 の B1）,41, 42 の 7 件でその描き方が見られる。これは「常陸国風土記」で書かれた伝説に因んでいる可能性もある。このように，筑波山の絵画は文学の影響を受けて，構図や色彩が類型化してきた側面もある。



左：図－１ 画）西村中和（1805）：「木曽路名所図会」のうち「筑波山」
右：図－２ 歌川広重（1856）：「名所江戸百景」のうち「飛鳥山北の眺望」



図－３ 現在の地図で見る江戸以外の視点場

図－４ 酒井抱一（1818）：「絵手鏡」のうち「筑波図」

画家に注目をすると，No.29（図 - 4）の酒井抱一は，大胆な構図やデザイン性が特徴[24]の琳派の系統に属し，No.41, 42 の鈴木其一もその流れを汲む。そのため彼らの絵は実際の景色というよりも幻想的であり，まるでデザイン画のようである。琳派との関係性は不明だが，同様のことが No.71, 73 の絵でも言える。

また，「三囲景図」（No.15）に代表されるように，当時三囲付近は庶民の人気を集め，度々名所図として描かれた[25]場所である。歌川豊春（No.11）は錦絵で，司馬江漢は銅版画で描いている。①案内書で述べたように，飛鳥山，日暮里，隅田川と同じように三囲神社からの東方の眺めも流行の一つだったと言える。

④その他（挿絵，宗教）

ここに分類されるのは 4 件で，和歌集の挿絵として「筑波図」（No.12）が「富士図」と共に描かれた以外すべて宗教性のある絵である。「親鸞聖人筑波山餓鬼済度御影」（No.28），「親鸞聖人御一代記図絵 巻 3」（No.65）は，親鸞が筑波山に 1226 年（鎌倉時代）に参詣したことに由来しており，こうした絵を使って庶民に親鸞の教えが普及された[26]。「直文筑波山形蔵頭蔵尾之詩」[27]（No.22）は，沼尻墨僊が山容や歴史，霊験を詠んだ七言漢詩を，筑波山形に女体山，男体山に登拝して下山してくるように並べたもの[28]である。いずれも当時の信仰心の強さが現れており，筑波山を掲載した名所図会等の案内書が出回っていた時代に，一方ではこうした宗教絵画があり，信者も存在していたことが確認できる絵である。

表 - 2　近世における筑波山の絵画の種類と構図とその視点場

No.	製作年（西暦）	絵の題目	書籍名	作者（著/画）	種別	種類				構図				構図Bの視点場	
						①案内	②記録	③鑑賞	④その他	A	B		C	江戸	その他（場所/県）
											B1	B2			
1	1648	筑波茂陰図（第九図）	武州州学十二景図巻	狩野探幽	紙本墨画淡彩	○				○					
2	1694	筑波町沼田村と臼井村神郡村水論裁許絵図		不明	紙本着色		○			○					
3	不明	椎尾山風景絵図		不明	絵図	○						○			椎尾山/茨城
4	1704	筑波山南面、筑波山東山 等複数枚	筑波山縁起	十一世隆光	冊子	○				○					
5	1741	筑波茂陰	飛鳥山十二景詩歌	林信充/鈴木鷺湖	紙本淡彩	○				○					
6	1755	筑波山上画図、筑波山下画図	日本輿地神廟仏刹部	森幸安	紙本淡彩	○				○					
7	1751-72	（中巻巻末）	隅田川長流図巻	狩野休栄	絵巻	○						○		隅田川	
8	1759-63	筑波山絵図		不明	紙本墨刷	○				○					
9	1760	浅間山真景図		池大雅	紙本淡彩一幅			○				○			浅間山/群馬
10	1763-	天地開闢筑波山絵図		不明	絵図	○				○					
11	1764-72	浮絵三廻之図		歌川豊春	錦絵			○				○		三囲神社	
12	1777	筑波図（富士の裏頁に記載）	富士筑波（二世祇徳編）	沾嶺/三輪	紙本墨印				○		○			隅田川	
13	1779	西峯男体宮・東峯女体宮の図 等	筑波山名跡誌	亮盛/小泉良栄	版本	○				○					
14	1781	（上巻巻末）	隅田川両岸一覧	鶴岡蘆水	木版筆彩	○						○		隅田川	
15	1783	三囲景図		司馬江漢	紙本銅版筆彩			○				○		三囲神社	
16	1799	那須眺望図		谷文晁	絹本着色一幅			○				○			那須/栃木
17	1800	隅田川全図	山水略画式	鍬形蕙斎	紙本色刷	○						○		隅田川	
18	1800	常陸筑波山	山水奇観	淵上旭江	版本	○				○					
19	1803	日暮里之遠望	絵本江戸桜	蔦屋重三郎		○						○		日暮里	
20	1805	筑波山	木曽路名所図会	秋里籬島/西村中和	版本	○				○					
21	1806頃?	日光御成道　巻第二	五海道其外延絵図	不明	絵巻		○					○			杉戸宿/埼玉
22	1809	直文筑波山形蔵頭蔵尾之詩		不明	状				○				○		
23	1809	筑波山	二十四輩順拝図会	了貞/竹原春泉斎	版本	○				○					
24	1812	筑波山	日本名山図会	谷文晁		○				○					
25	不明	筑波山	総州真景図藁	亜欧堂田善	洋風肉筆画	○				○					
26	不明	利根川と筑波山	総州真景図藁	亜欧堂田善	洋風肉筆画	○					○				利根川
27	不明	香取辺ヨリ見る筑波山	総常日記	春木南湖			○				○				香取/千葉
28	1818	親鸞聖人筑波山餓鬼済度御影		常福寺二十一世	掛軸				○	○					
29	1818-	筑波図（第20図）（第19図は富士図）	絵手鏡	酒井抱一	紙本墨画淡彩			○		○					
30	1818	右頁：筑波山腹大堂/左頁：筑波坊	臥遊備覧	小川万年/南桂	版本	○				○					
31	1818-30	隅田川両岸図		谷文晁	絹本着色一幅			○				○		隅田川	
32	1826	隅田川遠望図		池田孤邨	絹本着色一幅			○				○		隅田川	
33	1828		鞠塢編　墨水遊覧誌	小松原翠渓	紙本墨印	○						○		百花園	
34	不明	北条村望筑波山	諸国名所図	谷（島田）元旦	紙本着色	○				○					
35	1804-43	日本堤之桜	東都花暦十景	渓斎英泉	錦絵	○						○		台東区	
36	不明	隅田川	英泉江戸名所	渓斎英泉	錦絵	○						○		隅田川	
37	1833	筑波山遠望	富士筑波隅田川の圖	旦霞	団扇絵			○			○				霞ヶ浦or利根川
38	1834-36	大川橋	江戸名所図会7巻	長谷川雪旦	版本	○						○		隅田川	
39	1834-36	日暮里惣図	江戸名所図会5巻	長谷川雪旦	版本	○						○		日暮里	
40	1838-	桜川橋上より望む筑波山	天保巡見日記	芳賀市三郎			○				○				桜川橋/茨城
41	1842	富士筑波山図屏風		鈴木其一	紙本金地墨画淡彩			○			○				霞ヶ浦
42	不明	富士・筑波山図		鈴木其一	絹本着色（双幅）			○			○				霞ヶ浦or利根川
43	1843-	内国府間村より古河宿まで	日光道中絵図	不明	絵巻		○					○			栗橋宿/埼玉
44	1850	日暮里諏訪の墓	絵本江戸土産	歌川広重	紙本着色	○						○		日暮里	
45	1854	隅田堤遠景之図		歌川国貞	錦絵	○						○		隅田川	
46	1855	東都両国橋渡初寿之図		広重2代	錦絵	○						○		隅田川	
47	不明	隅田川渡しの図	東都名所図絵	歌川広重	錦絵	○						○		隅田川	
48	1856	日暮里諏訪の台	名所江戸百景	歌川広重	錦絵	○						○		日暮里	
49	1856	飛鳥山北の眺望	名所江戸百景	歌川広重	錦絵	○						○		飛鳥山	
50	1856	隅田川水神の森真崎	名所江戸百景	歌川広重	錦絵	○						○		隅田川神社	
51	1856	千住の大はし	名所江戸百景	歌川広重	錦絵	○						○		隅田川	
52	1857	王子稲荷の社	名所江戸百景	歌川広重	錦絵	○						○		王子稲荷神社	
53	1857	柳しま	名所江戸百景	歌川広重	錦絵	○						○		柳島橋	
54	1857	真崎辺より水神の森内川関屋の里を見る図	名所江戸百景	歌川広重	錦絵	○						○		真崎稲荷	
55	1857	墨田河橋場の渡かわら竈	名所江戸百景	歌川広重	錦絵	○						○		台東区橋場	
56	1857	深川洲崎十万坪	名所江戸百景	歌川広重	錦絵	○						○		江東区石島付近	
57	1857	南品川鮫洲海岸	名所江戸百景	歌川広重	錦絵	○						○		大井	
58	1857	浅草川大川端宮戸川	名所江戸百景	歌川広重	錦絵	○						○		隅田川	
59	1857	にい宿の渡し	名所江戸百景	歌川広重	錦絵	○						○		新宿	
60	1857	真間の紅葉手古那の社継はし	名所江戸百景	歌川広重	錦絵	○						○			弘法寺/千葉
61	1858	布施弁財天社	利根川図志	赤松宗旦	紙本	○						○			布施弁天/千葉
62	1858	印旛沼図	利根川図志	赤松宗旦	紙本	○						○			印旛沼/千葉
63	1858	息洲明神 船中より正面より見る図	利根川図志	赤松宗旦	紙本	○						○			息栖神社/茨城
64	不明	古河城涼櫓眺望図		枚田水石	絹本着色			○				○			古河城/茨城
65	1860	「筑波山に聖人餓鬼趣を助け給う」の図	親鸞聖人御一代記図絵巻3		版本				○				○		
66	1861-62	飛鳥山	東都三十六景	広重2代	錦絵	○						○		飛鳥山	
67	1861-62	飛鳥山投土器	東京自慢双筆三拾六興	歌川国貞	錦絵	○						○		飛鳥山	
68	1862	常陸筑波山	諸国六十八景	広重2代	錦絵	○				○					
69	1863	東海道之内　江戸芝新ン橋	東海道名所風景	一英斎芳艶	錦絵	○						○		新橋	
70	不明	常州筑波山圖	山水写真帖	田谷芝斎	淡彩	○				○					
71	江戸-明治	春山暁露図		田崎草雲	淡彩			○		○					
72	江戸-明治	富士図、筑波図	和亭集. 中	滝和亭	双幅			○		○					
73	江戸-明治	富士筑波	雅邦遺墨集. 乾	橋本雅邦	双幅			○		○					
					合計（件）	50	5	14	4	22	7	42 49	2	33	16

２．構図

構図Ａは22件あり，そのうちNo.2, 4, 8, 10, 13, 20, 23, 24, 34, 70の10件[29]が中禅寺参道の門前町や山麓の農村が広がる様子を描いている。その他は山容だけのもの（No.1, 5, 18, 25, 29, 68, 71, 72, 73）や，中禅寺境内のみを俯瞰で詳細に描いたもの（No.6, 28, 30）で，筑波山麓の様子が分かるのは全73件のうちわずか13%程度である。その中にも農作業をする人や参拝者の姿はない。筑波山を主体とした絵を描く際に，山麓にまで視野が及ばなかった，もしくは世間から必要とされていなかったと推測される。そのため当時山麓に暮らす人々の様子を窺い知ることはできない。

筑波山は常総地域という一地方の山でありながら，Ｂの構図をとる絵は49件もあり，遠くから眺望する山容が広く知られていたことが分かる。さらに，筑波山を主題とした絵（構図ＡとB1）が合計29件で，前景を主題とした絵（構図B2）は42件あり，この差も筑波山自体ではなく遠方風景の一部として筑波山を捉える傾向が強かったことを示している。構図Ｂのうち江戸を視点としたものは33件，江戸以外の地からは16件で，群馬，埼玉，千葉，茨城の土浦，霞ヶ浦など，広い地域に及ぶ（図 - 3）。こうした遠望図で特徴的なのは，霞ヶ浦を前景にするNo.41「富士筑波山図屏風」などや，利根川を前景にする「利根川図誌」の３件（No.61 - 63）とNo.26「利根川と筑波山」，そして江戸視点の場合は，前景に隅田川が多いことを合わせてみると，筑波山前景に水の景観を配置する絵が目立つ。水の景観と筑波山という構図が定番化しており，筑波山麓の農村景観を描くよりも主流だったと思われる。

３．おわりに

本研究は，近世の筑波山の絵73件を絵の種類と構図に着目して整理した。その結果，江戸から東に見えるこの山の景色を描くことが当時盛んであったこと，全国的な景物の一つに加えられる機会も多く，広く知られた山であったこと，しかし筑波山麓の景色には目が向けられていなかったことが把握できた。

美術史の観点から見ると，室町時代から続く狩野派に加え，文人画，琳派，西洋風画，浮世絵など，近世には新たな流派が生まれてきたが，筑波山という題材は消えることなくそれぞれの手法で描かれてきた。江戸東側を視点場とした構図は定番のテーマであり当時の流行でもあった。また，筑波山を青や緑で描くのは，常陸国風土記や古今和歌集等，古くからの文学に因む。遠景描写が多く，近景描写であっても山麓の人々の生活を表すいわゆる風俗画はない。さらに，江戸後期は西洋画の技法が入り始めたばかりで，どの絵も実景を捉えているとは言い難く，幻想的な印象を受けるものも多い。当時民衆に広まっていた浮世絵，そして霞ヶ浦や利根川，隅田川といった水の景観とともに描かれた絵は，どれも美しい風景に表現されてきた。ただし，道中図は美しい風景としてではなく，街道沿いの町，田畑，川，山々を記録するように淡々と描かれている。しかしその中でも「日光道中絵図」（No.43）の筑波山は鮮やかな青で着色され，前述した古今和歌集の影響が見てとれる。

以上を踏まえると，古くからの文学の影響や美術界における題材の踏襲など，過去に既に定番化されてきた筑波山のイメージがそのまま継承されてきたと言える。特に風俗画がない点に着目すると，当時の人々は筑波山を俗のものではなく，神聖なものとして捉えていたのではないかと予想される。近世は登拝から遊山への転換期であったことは「１．はじめに」でも述べたが，筑波山は霊峰富士山と合わせて描かれることも多く[30]，信仰の意識が近世後期になっても残っていたと推測できる。

筑波山は，標高は低いが関東平野においては突出して目立ち，常陸のランドマークとして存在していたことは想像しやすい。高層ビルのない時代、実際に江戸から二峰の特徴的な山容がよく見えたであろうし、中禅寺が幕府庇護下にあったこと，江戸名所としてその眺望が紹介されていたこと，京都で活躍していた池大雅も筑波山を題材にしていたことを考慮すると、現在よりも筑波山の知名度は高かったのではないかと思われる。

明治に入り本格的に西洋技法が移入すると、継承されてきた信仰心や文学に裏付けられる描写方法からの脱却が見られるのではないかと予想できる。今後は明治以降の絵画にも対象を広げ，人々の認識の変遷を追っていく予定である。

補注及び引用文献

1) 訪ねてきた神祖の尊の宿泊を富士山は断り筑波山は歓待したため，１年中雪が降り積もることになった富士山に対し，筑波山は人々が行き集うことが絶えなくなったという伝説。
2) ただし小松茂美他(1994)：善信聖人親鸞伝絵，中央公論社，143では「絵の筆法は素人風であり，墨書の筆致も覚如とは異なるので，後世の書入れと考えられる」とある。
3) 筑波山地域ジオパーク構想：
http://tsukuba-geopark.jp/category/tsukuba(2015.9.22参照)
4) 西海賢二(2012)：【改訂新版】筑波山と山岳信仰-講集団の成立と展開-，崙書房出版，28
5) 井田太郎(2005)，富士筑波という型の成立と展開：国華110(10),3-26
6) 根本由香(2001)，明治に残る江戸風意匠 - 柴田是真の「富士と筑波」と「五十の浪」を中心に－」：服飾美学(33), 65-80
7) 徐南姫，齋藤潮，鄭泰烈(2009)，山岳の形姿と構図から見た「漢陽真景」の描画地点の特質，ランドスケープ研究 72(5)，日本造園学会，915-921
8) 新海祥子，堀繁，油井正昭(1992)：「日本名山図会」にみる谷文晁の名山観，造園雑誌55(5), 49-54
9) 成瀬不二雄(1998)：日本絵画の風景表現 - 原始から幕末まで - ,中央公論美術出版
10) 茨城県立歴史館(2013)：特別展 筑波山 - 神と仏の御座す山 - ，土浦市立博物館(1988)：風景を描く 近世絵画にみる霞ヶ浦と筑波山，東京芸術大学大学美術館(2007)：歌川広重≪名所江戸百景≫のすべて の図録，及び茨城県天心記念美術館(2015)：富士山と筑波山のリーフレット，草雲美術館(2014)：富士山と筑波山の出品目録を参考にした。
11) 例外として，一英斎芳艶(1863)：東海道之内江戸芝新ン橋,東海道名所風景は山容の描写から筑波山と判断した。
12) 絵の単位はその形状によって「枚」「葉」「幅」などがあるが，本研究で扱う絵の中には「筑波山縁起」や「筑波山名跡誌」など，１冊の中に複数の絵があり，表 - 2にはまとめて一行に入れたため，本論文内では「件」とする。
13) 製作年順に並べている。ただし製作年が不明のものは，作者の生きた年代と照らし合わせた。表装や着色の有無は絵の種類の判別に繋がるため，「種別」欄には分かる範囲で記載した。
14) 前掲書4）西海賢二(2012), 19
15) 浅野秀剛監修(2007)：秘蔵岩崎コレクション 広重 名所江戸百景，小学館における解説で，背景が筑波山であると明示しているものは11枚，前掲書3)，井田太郎(2005), 17の中では「位置関係から筑波と判断されるもの」として「千住の大はし」「にい宿のわたし」が挙げられているのでそれらを含めて13枚とする。「四ツ木通用水引きふね」に関しては，須藤訓平・渡部一二(2006)：広重の描いた『名所江戸百景』にみる水辺空間の構成に関する研究，平成18年度日本造園学会全国大会研究発表論文集(24), 725-730の中で，筑波山が描かれているとされているが，東京芸術大学大学美術館(2007)：歌川広重≪名所江戸百景≫のすべて, 65にて「方角からいうと筑波山だが，広重の描く山形からみると日光連山であろう」と述べられているため，本論文では対象から外した。
16) これには江戸の町自体が富士山，隅田川，江戸城本丸，筑波山，富士山などが眺望できるよう計画されたことも関係している。(浅野秀剛監修(2007)：秘蔵岩崎コレクション 広重 名所江戸百景，小学館広重江戸名所百景, 195)
17) 久野健，辻惟雄，永井信一(2009)：美術史〈日本〉，東京堂出版, 94,95
18) 前掲書15）浅野秀剛監修(2007), 194
19) 前掲書17）久野健，辻惟雄，永井信一(2009), 96
20) 埼玉県立歴史と民族の博物館
http://www.saitama-rekimin.spec.ed.jp/?page_id=355 (2015.12.7閲覧)
21) 前掲書10）土浦市立博物館(1988)
22) 訳「筑波山には葉山繁山と峰々が多く，木が繁っているが，中に分け入るには障りにならない。と同様に，いかに人目が多くても，恋しい人に逢おうとすれば逢えないことはないのだ。」（石塚弥左衛門(1998)：山は筑波嶺 - 文人群像, STEP, 138）
23) 前掲書5)，井田太郎(2005), 4-5
24) NHK解説委員室：
http://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/700/216896.html(2015.12.9閲覧)
25) 中島由美(2009)：亜欧堂田善の銅版画名所図「ミメクリノツ」について，大正大学大学院研究論集33, 214-204
26) 前掲書10)，茨城県立歴史館(2013), 49
27) 絵とは一線を画すが，漢字の並びが二峰を形作っているため研究対象に含めた。
28) 前掲書10)，茨城県立歴史館(2013), 109
29) 「和亭集 中」も山麓の風景が描かれているように見えるが，近代デジタルライブラリーでは不鮮明で詳細が確認できないため，ここには入れていない。
30) 前掲書5),井田太郎(2005)